

は形だけは出来てる譯なのです。私も、前にはよくお参詣をしましたが、生意氣な奴だと、睨まれちやア困ると女房も心配するから、心に思ひながらも、遂御無沙汰になりました。ところで百姓のお前さんが、結構なことでは有るが、若し御役人に叱られたら何うします』

『叱られる譯はない。萬一叱られたら判るやうに聞かせて遣ります。石金さんには、決して迷惑はかけません。安心して下さい』

『さうかね、この前のやうに、途中で止めてくれとは云ひませんかね』

『大丈夫です。何んなことがあつても、中止しませんから確り頼みます』

石金は頭を下げてボロ／＼涙を流し、

『お爺さんは偉い人だ、……宜しつ引受けた。其氣なら此方も命に掛けても遣りますよ、石金が生一度の大仕事だ、有難い。お金は入りませんよ。立派に仕上げで見せませう。日本一の大忠臣楠公様のお墓を拵へさせて頂けるとは、勿體なくつて涙がこぼれます』

『ウム、金太郎さんは良い心持ちの人ちや、乃公も喜ばしい。のう皆さん』

『ハイ、私共も喜び居ります』

それより光圀公は青山家へ叮嚀なる御挨拶状を送られて、御建碑の指圖をなされば石金は、腕の良い弟子や石工を集め身體を清めて仕事にかゝりました。

お石碑の高さは三尺八寸、幅は一尺六寸、臺石は三尺に二尺の龜の形にして、其下には御影石の高さ二尺、五尺四方の土臺を造り、地盤の敷石は厚さ五尺にて一丈四方の、これもまた御影石其下に石の唐櫃を納め、その中に御鏡を安置、御鏡の裏には、楠正成之靈、源光圀造之、と彫られてございます由を承ります。お石碑の表面には、

「嗚呼忠臣楠子之墓」と隸書にて光圀公のお筆、裏面は、正成公湊川御戦死の事を書かれました其文は明の朱舜水といふ有名な學者、書は岡村元春といふ御方と傳聞いたします。されば江戸御出立の時より、御建碑の御用意ありしことゝ存じられます。さて石工達は金太郎を見習ひ。一心不亂に仕事を續けます。其働きは涙ぐましくらゐ。老公は御感心。

『宜くやつてくれますのう。皆も、賞めてやつて下さい……』

『ハ、石金は良い氣立ての男でございます。變物どころではない、清い職人氣質とでも申し上げますか、感心いたし居ります』

介さん覺さん達が、老公と一緒に見廻りながら喜びますので、職人達は全身汗をビツシヨリ、互に勵まし合、力をつくして居りますから、急速に、また入念に、どし／＼仕上げてゆきます。斯くして全く仕上りましたは、思ひの外早い日數でありました。石工達は勇み立ち金太郎が先に、『御隠居さん、出来ました。立派でせう。サアよく御覽なさい』

「ウーム、宜く出来ました。立派なこと、金さん始め皆さん御苦勞でした。御禮を云ひます、有難う〜」

介さん覺さんもち一つと見詰め、頭を下げて居ります。軍次郎は老公の心意に深く感銘し、また〜感涙を流して居ります。

光圀公は大いに喜ばれ、早速光源寺の僧を召され、お經を上げ香花を供へお焼香をなされました。介さん覺さんをはじめ、後から後と續いて御拜をいたします。

大楠公、湊川に御忠死あそばされたる延元元年五月二十五日より、三百六十年。時は元祿七年のことでございます。現今、湊川神社御門内にこのお墓がございます。御參拜の絶間が御座りませぬ。

さて、光圀公は職人一同を坂本屋に呼んで御馳走をなされ、多分に賃銀をおつかわしになると金太郎は辭退して私に御奉公をさせて下さいと受けませんから、其志は感心だがお受け致すやうにと、介さんから、さうして水戸の御隠居光圀公なりと聞かせました。金太郎は驚ろいて、ワアーツと泣き出した。人は感極まると自然に涙の出るものと見へます。職人達はベタ〜と頭を疊に擦り付けて口がきけなくなりました。石金はやつと顔を上げ、

「只の人ぢア無いと思つたが、水戸の黄門さまとは、何ぼ何でも氣がつかせませんでした。亂法な

口の利きやうをして、今日迄、とんだ失禮をいたしました。眞平御免なすつて、……オイ、皆さんも御詫をしろよ。御免をむつちまえよ」

老公はお笑ひになり。優しいお言葉をかけますと、金太郎を初め、頂いたお金を懷中に、お禮を述べて歸りました。翌日は、坂本屋の主人と金太郎に送られて、此處を御出立、一里餘も御供をする兩人を漸く御歸しになり。播州明石に出、加古川より姫路を通り備前の岡山にいでられ、備中の足守を過ぎ松山の城下に着されました。速き道中を泊りを重ねておいでになりましたので流石に御丈夫でも少しはお疲れもある様子。本町の松葉屋平藏方へお宿がきまる。軍次郎は恐縮して、

「さぞお疲れで御座りませう。拙者の爲に相済みませぬ」

「イヤ〜、其方の爲ばかりではない。心をいたためぬが宜い」

「ハッ、恐入ります。……御兩人にもお疲れでせう。相済まぬ儀で御座る」

「イエ、其御配慮には及びませぬ。サア軍次郎殿これからだ、勇氣を出されるよう」

「我々も確かり御味方仕らう」

「大ぶん話しが持てますのう。仕らうなどは百姓の言葉にはちと堅過ぎますな、アハ、」

「お耳の早いこと、油斷ができませんな、ハ、ハ、ハ、」

翌朝は疲れも無いと見え、介さん覺さんは交代で半日づつ、城下から在々村々を駈廻つた。老公は引籠つて居られる。軍次郎は人目を注意して見付けられぬやう、旅の疲れと云つて御話し相手となつて居ます。また翌日も同じことを續けた三日の間、さて翌日、

「御隠居、八方聞き込みましたるところに依りますと、中老職の大館郷左衛門は、軍次郎の申す通りの奴に相違なく、主人を手に入れ、我意を通して我儘増長、一方成らぬ悪人のやうに思はれます。城代家老職の水谷主膳は、正直な忠義者と存じられます。なれど大館に押へ付られ、今は病氣引籠り中の由、誠に氣の毒だといふ評があります。他の重役達は大館に、一言も返せぬやうにて話しには成りませんと、目付役等も、名ばかりにて大館の一と睨みの様子、中に只一人、町奉行を務めます岡井内記と申す者、何うやら確かりして居るやうに聞きました。且評判も宜いのであります。併し、大館の無理は相當延長して、自然領分の者の苦難となつて居る物と察しられます。」

兩人が代るく々に言上しますと。

「さうか、御苦勞であつた。それでは町奉行に會つて見ませう」

「お宜ろしいでせう。御供仕ります。」

そこで宿屋の主人を呼ばれて、

「時に御亭主、お町奉行の評判は如何、岡井さんと仰言さうですな、さうして正直な人ですか」

亭主は妙な顔をして、御顔を見上げ、

「御客さま、さう御尋ねでは御返事が出来ません。お町奉行と申しますと、江戸の將軍様の御膝元でも、二千石三千石の大きなお旗本の中から、智慧の勝れた立派な心の御方を撰まれて、町御奉行になされます由、また國々の御大名さまでも同じこと、立派な御方をお撰みになります。岡井さまもさうです。正直でない方が務めたら大變です。そんな事のあらう道理はございません」

「成程、それでは正直ですな、間違なく」

「御念には及びません。私が太鼓判を押して受合ます。差合があると不可ませんから、一番とは申しませんが、二番とは下らない御役人ですよ」

「ウム、これは宜さそうだ、それなら安心して御願ひが出来ますな、さういふ御奉行なら、願ひ人の都合に依つて出張もなさるだらう。一寸来て頂けませうか、年寄のことですから」

「若し、御客さんは何を云ふのです。貴方方は常陸國のお百姓でせう。それなのに、お町奉行を呼びたい等とは、ちと御考へになつたら何うです。……御連れの方向でせう」

「サア、私等の考へでは、都合によつたら出張されても宜いかも知れぬ。夫れが出来ないやうでは、餘り良いお奉行さんでも無さそうだ。アハ、ハ、ハ、」

「オヤ／＼／＼、これは驚ろいた。では御免ください」

亭主は呆れて帳場へすわり、目を白黒させて、ブル／＼と震えた。

「オイ、お前達、六番の御客に氣を付けた、白い髭の爺さんと、優しい顔の若い男は、餘程逆上て居る氣が狂つて居るやうだ。あア驚ろいた」

「お前さん。何うしたの、何が變なのです」

「だつておしづ、町奉行さまに来て貰へまいかと云ふぢアないか、……アレ／＼出掛るぜ、若しお出かけですか」

「ハイ行つて参ります。一人留守をして居ますから頼みますよ」

「お早く御歸りなさい。……いま口を利いたお客は正氣なのだ、留守番も正氣らしいな」

「まア、氣味が悪いはねえ良人」

「ハ、ハ、ハ、御隠居と介さんは、氣が變だと話して居りました。私と軍次郎は正氣らしいと、イヤハヤ滑稽なことです」

「ウフ、ハ、ハ、然う見へるかも知れないのう。介さん氣を付けなさいよ」

「これは驚ろきました。御隠居に相槌を打ちましたので、狂人あつかいは恐入りましたな」

苦笑しながらおいでになると、町奉行所は直ぐ判りました。門前へ来てお辭儀をなさると、門

番がジロリ、

「何ですか、……中へ這入つて願書を出しなさい。早くせぬと混合ますぞ」

御隠居の態度とお顔を見て、門番は可憐である。受付の役は門を入るとすぐ見へる。

「御願ひ致します。私共は常陸國の天神林と申すところの百姓で光右衛門、供の覺三、私は介三願書は持参 仕りませんが御奉行さまに直々御願ひがござります。お目通りを御取次下さい。此段御願ひいたします」

「お前等が何と申しても、願書の無い者は取次できぬ。出直して参れ」

「成程御尤ではあります但其所のところを、特別に御取次ください。お目にかゝれませんとお奉行は切腹なさらねば成りますまい」

「何だと、大きな事を云ふな、亂暴なことを」

「イエ／＼、亂暴や威かしでは無い。あなたも切腹ですぞ、内々救つてあげたいと來ましたのだ早く取次なさい」

と介さんが、グツと睨んだ。すると受付の役人は何にも云はずに立上り。奥の方へ行くと入違ひに他の受付役が出て來た。少しく過ぎると前の人が出て参りまして、三人を見廻し、
「案内するから、拙者に付いて來なさい」

アツく云ひながら、先に立ちます。續いて這入ると庭を前にした廣い座敷で誰も居ません。御座りに成つて待たれると、正面の襖が開いて侍が三人入来り。ピタリと座についた。眞中の座に居る四十二三の男が座をすゝめ、御顔をジロリと見廻し、

「拙者が、町奉行勤役岡井内記である。面會の上願ひの筋があると聞く、それは何事であるな、速慮なく申すが宜い。さうして老人が光右衛門であるか」

「ハイ乃公です。右が介三左が覺三です。さて御奉行さん。貴方は正直で物の判りが宜い。松山藩では一番の智者だ仁者であると聞いて、お目にかゝりに來ました」

「控へなさい老人、然う云ふ言葉は、奉行に對し無禮では無いか、お目にかゝりに來たとは何事だ、今日は休でない。多忙な此方なれど何か大事を語るとか、願ひがあるとか、また拙者が切腹せねばならぬとか、數々を申す由取次ありし故會ふたのだ。餘談は止めて語るが宜い」

「ウム、なか／＼、夫れでは早速話ませう。お奉行さん、堤軍次郎に、何故仇討をさせません」

「何と」

奉行の面色がサツと變つた。左右の下役は左の肩を張つて刀を引寄せた。介さん覺さんは一ト膝すゝめて老公を守護た。

「まア靜かにお聞きなさい。乃公は軍次郎に會ひました。さうして一切を聞きました。水谷家で

は孝子の仇討を妨げますか、重役衆は何うしました。役人衆は何う考へて居る。お奉行さんに聞きに來ました。それとも軍次郎の片言を信ずるは違ふと云はれますか、それなら判るやうに話して貰ひませう」

言葉が詰つた岡井内記は、ホツと一息ついて、また御隠居の御顔を見詰め、

「老人、軍次郎の片言とは決して申さぬ。併しながら、武家は武家の掟がある。農家は農家の作法掟があらう。老人は百姓だと云ふ。それなら武士の掟に助言は遠慮して貰ひたい。軍次郎に會つたら傳へても宜い、時來たらされば何事も成らぬ、早まつて松山に來れば命はあるまい。何人の援助ありとも、未だ／＼其時ではあるまい。深く考へねばならぬ」

「成程、御親切なこと、併し其御言葉によりても悪人は判りました。さう判つて居りますものを、お奉行はなぜ勇氣を出して殿さまへ御意見をなさらぬ。悪人の増長に困る人々が多數ようです。此事が江戸御役人方に聞こえましたら、無事では済みますまい。殿さんは何うなります。また重役衆は、……お奉行さんも切腹ものぢや、夫れがお氣の毒であるから私が來ました。他國に知れぬ内、孝子に仇を討たせなさい、然うなると助かる者が多く出來ませう。殿さんの行狀も自然と改たまりませう。思ひ切つてお遣りなさい」

この御言葉に、奉行はだん／＼下を向き、ち／＼と考へて居ります。下役二人は刀を下にをき

両手を膝について頭を下げ老公の方へ叮嚀に會釋をしました。正しき御言葉と、自然にあらはれる御威光にうたれたものと見へます。暫くして奉行は膝をすゝめ、
『忝なき老人の御注意を喜びます。就ては此方より挨拶を申す。宿所を書いてお出し下さい。御苦勞でござつた』

一言々に、言葉が叮嚀になつてきました。老公も御満足、につこりなされて介さん覺さんと顔を見合せ、やがて、

『お奉行さん、よく判りました。夫れでは待つて居りますよ。間違ふとまた來ますでのう』
介さんが書いて奉行に手渡し、老公はお立ちになる。下役は門前迄送つて出る。

『御隠居、奉行どの、餘程苦しい立場に居りますな、仰せられて居るうち、顔色を見て氣の毒になりました。常から心痛して居つたものと見へます。だが中々話せさうですな』

『併し、今迄はグツト押へられて、手も足も出なかつたと見へます。ウフ、、、』
『さうぢやらう。可哀さうに』

小聲で話しながら、宿に戻つてこられました。
『いま歸りました。連れは居りますかい』

『お歸りなさい。エ、お連れさんはお待ちですよ』

『お疲れでございませう』

亭主は苦い顔をした。女房や女中に目配せをして、

『先刻も云つた通り。氣を付けなよ』

『ハイ、笑つてばかり居ますよ。あの介さんとかいふお客、馬鹿ぢアないかしら、變なお客さんですわえ』

『變だともお奉行さまに來て呉れなど、何う考へたつて俺には、正氣の沙汰とは思へないよ。年寄は毫碌して居るとしても、若いお客が一緒になつて、お奉行さん出張しても宜いなんて呆れたよ。宿替をして貰ひたいな』

『本當ですよ。でも斷りにくいわねえ』
其所へ介さんが來て、

『一寸買物をして來ます。イエ、私でない』
『さうですか、お履物を……』

門 黄 戸 水
『あの、御亭主、お奉行さんから使ひが來ます。お奉行も來て下さると思ひますので、心配ないように、極内々で、靜かに取次を頼みます』
と側へ寄つて耳うちをした。

「ウヘー、……本物々々、厄介な奴等が泊つたぞ、うつかり断ると面倒だらう。ウーン」
亭主は唸つて居た。其夜兩人の武士が来て離れ座敷に通じ、主人を呼ぶので出て見ると、町奉行岡井内記が兩腕と頼む下役の、柳定助、川島幸内でありました。

「旦那方御揃ひで、何か御用でせうか」

「ウム、外では無いが、泊り客の中に白い髭の長く生じてをる老人が居るかな」

「へエ、居ります。常陸のお百姓だと申してをります。……エ、光右衛門さんです」

「ウム、今御在宿か、お連れは……」

「へい、おいでになります。皆さんも」

「それでは取次を頼む、町奉行が御面會に参りましたと」

「ウヘー、ホ、本當ですかお兩人さま……」

亭主はブル／＼震えだした。

「何を震えて居る。早く取ついで呉れ、お奉行が表に待つておいでだ、そして内々であるから他に知れぬやうに注意をして呉れ」

「へい／＼、畏りました」

取次をして、引返した主人は、

「お待ちして居ると申しました。旦那方、あの人達は氣が狂つては居ませんか、變ですわえ」

「何をいふ。では直ぐにお見へになる」

亭主は立つたり、座つたり。

「サア皆んな、確かりしろよ。お奉行さまをとろ／＼呼寄せたぜ、イヤハヤ大變なことに成つたぞ、あの爺さんは何んだらう。此納りは何うなるか、また明晩の御話しに……」

「何をいふの、おまへさんも變だよ。確かりおしなさいよ」

内儀の方が落付いて居る。ところへ奉行が来る。今の兩人と外に一人の侍がついて來ました。

夫婦がそつと出迎へ、下役は別間に、奉行は同行の侍をつれてお居間に入る。軍次郎は次の間に御隠居は兩士を見て、

「宜く來て下された。サア此處へ、何うぞ御遠慮なく」

「ハイ、先刻は失禮をいたしました。……この人は目付役石川左近殿で御座る」

兩士が挨拶をすると、老公も御會釋をなさる。介さん覺さんも互に挨拶が終ると、

向さて御老人、早速目付とも相談をなし、水谷主膳殿にも談合致しましたが、病中の事故我々に

任せられました。されば、他に知れざる内一日も早く、急速に同志十數人と會談、軍次郎を探し

し仇討を許すことに決定つかまつりました。何卒江戸表へは御内聞に願ひたい。實は斯く計り度

存じ居りましたが、何分にも殿は大館を熱愛なされます。また大館の剣道は餘りに勝れて物凄く
いかなる劍者も近寄れず、遂今日に至りました。面目次第もござらぬ。就て軍次郎の住所御存じ
なれば御教へ下さい。次に御伺ひいたしたきは、御本名で御座る。重き役目の御方と拜察仕り
ます』

兩士は、手をついて頭を下げた。

『ウム、宜く判りました。……乃公は、水戸の隠居光岡ぢや』

『ハ、ハ、ツ』

兩士は飛下つて平伏した。さうして恐る／＼頭を上げ、

『失禮の段、幾重にも御詫仕ります。實は、先刻御顔を拜しました時より若し御老公にては、
と考へをりました。大阪に御滞在のやうに蔭ながら承はりをりました故、されど此松山迄御尊來
とは存じ申さず、あゝ申譯もなき御無禮にござりました』

兩士は代る／＼御詫をする。ところへ軍次郎が出ました。

『御兩士、暫くで御座る……』

『あゝ、堤氏、軍次郎殿、さては、御老公に御救ひを受けられましたるか。幸はせて御座る』

『武運再來の時御座るぞ軍次郎殿』

三士は顔見合せて、互に喜び涙をぬぐいました。介さん覺さんも挨拶をかはして、これより仇
討の相談をなし、深夜兩士は歸宅をした。……宿の亭主は堅く口止され、後で判る御大切にお宿
をせよと申付けられ、夢のやうに思つて居ました。その翌々日、大館郷左衛門を連出した。場所
は水谷主膳の邸の裏道、主膳の役を譲ると計られ、其相談に主膳方へと案内され、傲然として來
たのであつた。奉行目付を先に十餘人が前後から、話をしかけて油断をさせ、いま裏門近く來
た折しも、木蔭より飛出した軍次郎が、

『珍らしや大館郷左衛門、父の仇討、イザ勝負せよ。來たれつ』

大刀を抜いて斬つてかゝれば、ヒラリツと體を轉した大館はから／＼と大笑して、

『大馬鹿者、殿の御怒りも知らず仇呼ばはりは何事だ、命を賣りに來をつたか返り討にして呉れ
ん。サア來い』

早くも鞘を飛ばして大刀を振りかぶつた大館の劍剛を、少しも恐れぬ軍次郎が死にもの狂ひに
斬り込んだ。

『エイツ』

『ヤーツ』

此時老公は、ちーつと見詰られて居られましたが、軍次郎がチリ／＼ツと、一タ足三足下がつ

て来たとき、和田平助より皆傳を受けて居られる免許の劍道、合氣の術。一ト足すゝまれ大館目がけて一聲高く、

『エーイツ』

と氣合をかけられた。

『アーツ』

大館はヨロ／＼とした。途端に斬込む軍次郎の早業、横に拂はれバタリと倒れた血煙りと共にワアーツと、一同の聲が上がった。軍次郎は嬉涙で聲も出さず、老公の前に伏して仕舞った。

この仇討は、水谷家の面目を考へ、重役が悪人で有りしことなど他に知れぬ間に、内々で済ませたもの、出羽守に届ければ大館を逃すかも知れませんが、……翌日聞いた出羽守が大いに怒るを老公が充分御意見、遂に心を改めて深く御詫を申上げました。主膳は病床にお目通り。感涙にむせびました。大館は妻子もなく、家は亡びた。軍次郎は主家に歸參、老公は皆に別れて、送りを辭退なされ、また／＼御出立、兵庫においでとなり。楠公のお墓に拜せられました。次々に多くの拜者を御覽ありて非常に喜ばれました。坂本村の田畑を求められ光源寺の僧にたくされ、これを香花料にあてられたりと、石金等にもお會になり。それより大阪に御立寄り。然うして江戸へ無事御歸邸、程なく太田の西山にお歸りとなりました。大阪に足をとゞめた彼の長吉は親父

に再會して、はる／＼御禮に参りました。さうして野州の佐野へ行き農家に父子は落付いたと、これも、數多き御仁徳の中の一ツで御座いませうか。

光圀公は、一生を働き通されたお方と存じます。中にも大なるお働きは、大日本史を御編纂なされし御功績と、大楠公の御建碑でござりませう。其他數々のお働きは實に名高いことであります。

今回は黄門さま御旅行談の内、關西の巻を口演いたしました。

門 黃 戶 水 談 講 切 讀

昭和十六年十一月廿五日印刷
昭和十六年十二月一日發行

著 者 田 邊 南 龍

發行者 東京市神田區神保町一ノ三〇
大 谷 德 之 助

印刷者 東京市神田區猿樂町三ノ二三
佐 藤 三 次

印刷所 東京市神田區猿樂町三ノ二三
三 美 堂 印 刷 所

發行所 東京市神田區神保町一ノ三〇
天 佑 書 房
振替東京三三〇七番

(日本出版文化協會登記證第一九〇五〇番)

定價 四拾五錢

東京市神田區猿樂町二ノ九
日本出版文化協會登記證第一九〇五〇番
社 會 式 株 給 配 版 出 本 日 元 給 配

41
503

天佑書房の讀切武勇講談

約二百頁・定價各一册四十五錢・送料十錢

田邊南龍師口演	宮本武藏
山邊南鶴師口演	柳生旅日記
田邊大龍師口演	大久保彦左衛門
田邊南龍師口演	水戸黃門
田邊南鶴師口演	赤穂義士
邑井貞吉師口演	荒木又右衛門
田邊大龍師口演	寛永三馬術
田邊南龍師口演	太閤記
神田伯龍師口演	寛永御前試合
田邊南鶴師口演	堀部安兵衛

終

¥.45